

出エジプト記13章「長子の聖別」

1A 長子の贖い 1-16

1B 主の所有 1-2

2B 種無しパン 3-10

3B 初子の捧げ物 11-16

2A 民を守る荒野の道 17-22

本文

出エジプト記 13 章を開いてください。私たちは、出エジプト記でこれからエジプトを脱出するイスラエルの姿を見えています。前回、最後の災いであるエジプトにいる初子の死を見ました。人の場合は、長子と呼ばれます。初めに生まれてきた男の子です。その災いにおいて、主はイスラエル人に対して、過越の祭りを守るように命じられます。子羊を屠り、その血を家の門柱と鴨居に塗る儀式です。その血を見るならば、わたしは過ぎ越すと宣言されました。

そして、私たちはちょうど昨日、礼拝においてイエス様が過越の食事を弟子と共にされたところを読みました。イエスご自身がその子羊と同じように殺されます。肉は鞭打ちによって裂かれて、十字架に釘付けにされます。その裂かれた肉によって私たちの魂も体も癒され、流された血によって私たちの全ての罪が赦されることを思い出します。そして出エジプトは新たな意味を持つようになりました。エジプトがサタンの支配するこの世であり、奴隷は罪の奴隷を意味して、そこからキリストの流された血によって解放されて、そしてこの世は神によって裁かれるというものです。そして 13 章に入ります、1-2 節を見てみましょう。

1A 長子の贖い 1-16

1B 主の所有 1-2

1【主】はモーセに告げられた。2「イスラエルの子らの間で最初に胎を開く長子はみな、人であれ家畜であれ、わたしのために聖別せよ。それは、わたしのものである。」

13 章は、長子あるいは初子についての教えです。なぜ最後の災いで、主はエジプトの長子また初子を打たれたのか、その理由を 4 章でお語りになっていました。「主はこう言われる。『イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。わたしはあなたに言う。わたしの子を去らせて、彼らがわたしに仕えるようにせよ。もし去らせるのを拒むなら、見よ、わたしはあなたの子、あなたの長子を殺す。(4:22-23)』」主が、イスラエルをご自分の子、また長子としてみなしていたので、それでファラオが手放さないのであれば、彼の長子をもって手放すようにされると言われていました。そして、エジプトの長子が殺された今、イスラエル人に対して、彼らの長子や初子を聖別しなさい、それは

わたしのものであると言われていました。

私たちは今、出エジプト記を通して、世とそこからの救い、贖いを見えています。私たちそれぞれが世に生きていて、自分はその中のごく一部にしかすぎないと思っているところで、天地を造られた神が、自分を愛してくださると言われ、どれほど愛しておられるかといえば、ご自分の独り子をお渡しになるほど愛しておられると言われるのです。そして、御子が自分の罪の身代わりとなって死んでくださったことによって、罪を赦し、清め、今度は私たちをご自分の子として養子縁組にしてくださいました。神がご自分の御子を持っておられますが、その関係の中に私たちも招き入れてくださったということです。「神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。(ローマ 8:29)」

そもそも、長子がなぜそれほどまでに貴いのでしょうか？人間の世界で考えるならば、確かに長男は大切な存在です。その家を受け継ぐ存在ですね。ちょっと昔の家父長制度であれば、父亡き後に、長子はその家を代表します。

御子について教えている、コロサイ書の箇所を見てみたいと思います。「1:15-17 御子は、見えない神のかたちであり、すべての造られたものより先に生まれた方です。なぜなら、天と地にあるすべてのものは、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、御子にあって造られたからです。万物は御子によって造られ、御子のために造られました。御子は万物に先立って存在し、万物は御子にあって成り立っています。」御子が、「すべての造られたものより先に生まれた方」とありますが、別訳では「**全被造物を治める長子**」になっています。長子とは、第一に、神のかたちそのものだということです。神の本質の完全な現れです。長子という時は、その父自身をそのまま表している存在だということです。イエス様が、「わたしを見た者は、父を見たのです。」と言われました。ですから、父なる神が天地を創造したのですから、御子ご自身こそが天地を創造された方であり、父と子は一つなのです。

こうした父と子が一つであるという交わりの中に、私たちを養子縁組にして交わりを持たせるといのが、神のご目的です。「私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。(1ヨハネ 1:3)」と言われます。その交わりの中に入るには、神が御子を下されたのと同じように、自分自身もすべてが神のものになったのだということを信じ、受け入れなければいけません。それが、「聖別」の意味する所と言ってよいでしょう。聖別とは、「聖め別たれる」ことです。他のいろいろなものの中から、別たれて、神だけのものになるということです。数多くの人々がいますが、その中で自分自身が神のものになっているということです。自分はもはや自分のものではなく、神に贖われた者であり、自分自身は聖霊の宮なのだということです。そして、自分自身を生ける供え物として、神にお捧げするということです。さらには、自分の持っている物もその初物、すなわち初めに得た収穫を主にお捧げするということです。

そして、イスラエルに対しては、男の子であれ、家畜であれ、初めに生まれてきた男の子は、聖別され神のものにされます。人間をもちろん、いけにえに捧げることはありません。けれども、主への奉仕のために別たれるのです。しかし、生ける供え物となるのです。後に主ご自身が、レビ人を長子の代わりに取ることにしたと言われます(民数 3:12-13)。ですので、レビ人は生後一か月目から主のものとされて、神殿での奉仕のために捧げられています。ルカによる福音書の初めのほうに、生まれて間もない子を連れて来た夫婦の話がありますね？はい、イエス様です。ヨセフとマリアが生後八日目に、割礼をイエス様に授け、産後の清めの期間を終えるとエルサレムに向いました。幼子イエス様をエルサレムに連れて行き、そこで主に捧げたとあります。その時に、鳩をいけにえとして捧げました。このように、自分たちが主によって買い取られて、それで自分自身も主ご自身の者として生きます。

初物を捧げなさいという命令が律法や箴言にあります。財産でも自分にとって大事なものは、給料が入ってきた時です。その一部を無条件に主のために取り分けて、主のために捧げることも、買い取られた、贖われた者としての生き方です。

2B 種無しパン 3-10

3 モーセは民に言った。「奴隷の家、エジプトから出て来た、この日を覚えていなさい。力強い御手で、【主】があなたがたをそこから導き出されたからである。種入りのパンを食べてはならない。4 アビブの月のこの日、あなたがたは出発する。5 【主】は、カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ヒビ人、エブス人の地、主があなたに与えると父祖たちに誓った地、乳と蜜の流れる地にあなたを連れて行かれる。そのときあなたは、この月に、この儀式を執り行いなさい。

すでに 12 章で、種無しパンについての教えがありました。子羊を火で焼いて食べるだけでなく、苦菜と添えて種無しパンを食べることも教えられています。事実、彼らはパン種を入れて食べるような時間もなく、急き立てられるようにしてエジプトを出て行かねばなりません。そしてその日が、はっきりと「アビブの月のこの日」と主は言われています。アビブ、つまり麦の穂という意味ですが、その月の 14 日目のことです。この日に出発します。そして、アブラハム、イサク、ヤコブという父祖に主が誓われた地というのが、カナンの地です。そこにはカナン人が住んでいて、その他の住民もいますが、全員をカナン人として総称することもあります。ヒッタイト人については、トルコにヒッタイト帝国の遺跡が見つかっていて、その地域からイスラエルの地域まで広範囲に住んでいたことが分かります。

そこは、「乳と蜜の流れる地」です。乳は牛や羊などの牧畜、蜜は作物を表しています。シナイの荒野から北上すれば、このカナンの地はまさしく乳と蜜の流れる地です。そこは霊的には、神の約束のところであり、御霊による豊かな生活を意味し、また最終的に受け継ぐ神の国も表しています。私たちは、その約束を得るために地上で生きているとすることができるのです。

6 七日間、あなたは種なしパンを食べる。七日目は【主】への祭りである。7 七日間、種なしパンを食べなさい。あなたのところに、種入りのパンがあってはならない。あなたの土地のどこにおいても、あなたのところにパン種があってはならない。

過越の祭りの次、十五日から七日間、種無しパンの祝いがあります。七日間、種ありパンを食べてはいけないのですが、七は神の数字で完全数です。パン種は、罪を表します。全体に広がります。つまり、過越の子羊によって、私たちの罪が完全に取り除かれ、清められたことを表しているのです。全く清められたのです、「イザ 1:18 さあ、来たれ。論じ合おう。——【主】は言われる——たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

8 その日、あなたは自分の息子に告げなさい。『このことは、私がエジプトから出て来たときに、【主】が私にしてくださったことによるのだ。』9 これをあなたの手の上のしるしとし、あなたの額の上の記念として、【主】のおしえがあなたの口にあるようにしなさい。力強い御手で、【主】があなたをエジプトから導き出されたからである。10 あなたは、この掟を毎年その定められた時に守らなければならない。

ここで主が、種なしパンの祝いについて繰り返しておられるのは、息子に告げるためであります。ですからテーマは、長子、あるいは息子であることが分かります。息子が、父から出エジプトの記念を受け継ぐのです。そのことによって、どの世代も出エジプトを経験し、体験していくのです。私たちは、キリストによって神の贖いを受け継ぐ者です。その流された血潮と裂かれた肉を覚えて、聖餐を守り、そして今も、罪のための死なれた主がよみがえり、生きておられることを私たちの間で示していくのです。

そして、このことを記念にするために、「手の上のしるしとし、あなたの額の上の記念として、【主】のおしえがあなたの口にあるようにしなさい。」と言われます。ユダヤ教の人は「テフィリン (tefillin)」と呼ばれる聖句箱を、額の上と左腕に括り付けています。けれども、イエス様はこの習慣の背後にある偽善を責められました。「彼らがしている行いはすべて人に見せるためです。彼らは聖句を入れる小箱を大きくしたり、衣の房を長くしたりするのです。(マタイ 23:5)」人に見せるためになっていました。



主の戒めを額の上に付け、また手に結びつけるのは、心と魂に刻み込むためです(申命 11:18)。私たちの額に主の御言葉があれば、私たちが見るもので、つまずきになるものは避けることでしょ。また手に御言葉があれば、自分が行うことで、つまずきになるものは避けるでしょ。そして、口ずさむことについては、コロサイ書に、みことばを豊かに蓄えなさいということが薦められています。こうやって、主を思い起こすことができるのです。

3B 初子の捧げ物 11-16

11 【主】が、あなたとあなたの父祖たちに誓われたとおりに、あなたをカナン人の地に導き、そこをあなたに与えられるとき、12 最初に胎を開くものはみな、【主】のものとして献げなければならない。家畜から生まれ、あなたのものとなるすべての初子のうち、雄は【主】のものである。

先に主は、人であっても家畜であっても聖別しなければならないことを教えられました。人について先ほどお話ししました。ここでは家畜の初子に神は集中しておられます。まず、この戒めは荒野の旅をしている時ではなく、カナンの地に入ってからのことです。そこで、主が牛や羊において、豊かに祝福してください。その基になっているのが、「初子のいけにえ」です。もう一度、申し上げると、初子というのは、その家にとって第一のもの、代表のものです。順番が初めということだけでなく、優先順位で初めでもあるのです。イエス様は、復活の初穂してよみがえられたという言葉が第一コリント 15 章にあります。イエスが甦られたので、イエスに連なる者たちも甦るということの意味です。ですから、初子を主に捧げることによって、家全体が主のものなのだということが信仰表明できているのです。

13 ただし、ろばの初子はみな、羊で贖わなければならない。もし贖わないなら、首を折らなければならない。また、あなたの子どもたちのうち、男子の初子はみな、贖わなければならない。

ろばは、後に汚れた動物の一つに数えられます。反芻をしない動物は汚れているとされます(レビ記 11:26)。それで主へのささげ物にはすることができません。代わりに羊によって贖いなさいと言われます。ろばの子であっても、それはいけにえとして捧げられなくとも、それでも主のものだということを知ることができます。そして、仮に羊がいなかったとか、捧げたくないとかしたとします。そうであったとしても、それを自分のものとしていることはできず、首を折らなければいけないと命じておられます。つまり、「汚れているからといって、捧げない理由にならない」ということです。主は徹底して、ご自身が主であることを示すように命じておられます。

14 後になって、あなたの息子があなたに『これは、どういうことですか』と尋ねるときは、こう言いなさい。『【主】が力強い御手によって、私たちが奴隷の家、エジプトから導き出された。15 ファラオが頑なになって、私たちが解放しなかったとき、【主】はエジプトの地の長子をみな、人の長子から家畜の初子に至るまで殺された。それゆえ私は、最初に胎を開く雄をみな、いけにえとして【主】に献げ、私の子どもたちの長子をみな贖うのだ。』16 このことは手の上のしるしとなり、あなたの額の上の記章となる。それは【主】が力強い御手によって、私たちがエジプトから導き出されたからである。』

先ほどと同じ教えですね。種無しパンの祝いについて、息子が質問してきた時に父が答えます。ここでも同じように、息子に聞かれたら父が答えます。なぜ初子をいけにえにするのか？と。それ

で、先ほど説明したように、イスラエルは神にとって初子であり、エジプトが去らせるのを拒んだので、神は力強い御手をもって彼らの初子を殺されたのです。神はすばらしいです、悪の力がどんなに私たちを自分に留めようとしても、神は力強い御手でその力を無き者にして、決して私たちに触れないようにしてください。そのような方なので、私たちが自分たちにとって最も大事なものを、神に捧げるのです。そう、礼拝とは、「自分にとって最も大事なものを神に捧げる」と言ってよいでしょう。この前の学び(マタイ 26 章)では、香油をイエス様に注いだマリアの姿がありました。あれが、礼拝の姿です。

2A 民を守る荒野の道 17-22

さて、ここまで主が初子の聖別について教えられた後で、イスラエルがエジプトを出た旅について語られます。12章 37節から 42節にて、その出て行った話が書いてあります。その続きです。

17 さて、ファラオがこの民を去らせたとき、神は彼らを、近道であっても、ペリシテ人の地への道には導かれなかった。神はこう考えられた。「民が戦いを見て心変わりし、エジプトに引き返すといけない。」18 それで神はこの民を、葦の海に向かう荒野の道に回らせた。イスラエルの子らは隊列を組んでエジプトの地から上った。



エジプトから、神が約束されたカナン人の地を見ますと、最短距離は地中海沿いに走っている「ペリシテ人の国の道」です。「ペリシテ人」は、今のガザ地区、イスラエル南部の地中海沿岸地域に住んでいました。そしてここはギリシヤ・ローマ時代に、「海沿いの道(ヴィア・マリス)」と呼ばれる国際幹線道路でありました。これが最短距離です。¹

私たちがエジプトのカイロに飛行機で降り立ち、それからイスラエルに陸路で入った時も、ガザ地区に向かう道は通過することはできず、紅海のアカバ湾の北端に位置するエイラットという町に向かう道を通りました。なぜなら、ガザ地区はパレスチナ人の自治区になっており、今はイスラム原理主義組織ハマスが支配しているからです。

¹ https://www.sekainorekisi.com/my_keywords/%E5%87%BA%E3%82%A8%E3%82%B8%E3%83%97%E3%83%88/

かつて同じように、安全保障上、通ってはいけない道でした。二百万人はいたであろうイスラエル人の行列は、ペリシテ人にとって大きな脅威となり、戦争になることは必至だったからです。生まれてからずっと奴隷生活をしてきたイスラエルの民が、戦うことなど決してできません。それでエジプトに戻ってしまうことを主はお分かりになっていたので、「葦の海」すなわち紅海沿いの荒野の道を通るようにされました。いつ、ペリシテ人と戦うかと言いますと、ダビデの時代です。ダビデが、ペリシテ人のゴリアテと戦い、彼によって周囲の民がイスラエルに従属し、イスラエルが平和になります。

それで荒野の旅に神は導かれます。シナイの荒野の山のふもとで、主が降りてきてくださり、さらに十戒を始めとする数多くの戒めを神は与えられました。また、イスラエルは奇蹟によってパンがまた水が与えられ、主なる神の真実を学ぶこととなります。単に、物理的に約束の地に入ることよりも、霊的に神の真実を知ることによって、初めて約束の地の貴さを知ることができるのです。私たちが同じです、荒野の旅というのは、「ただ寄り頼むべきは神のみだ」というのを知る期間です。その土台があってこそ、乳と蜜の流れる地についても主のみを神とする礼拝を持つことができます。このように、主は徹底的に、彼らを聖別された民、神のために聖め別たれた民として整えておられるのです。

19 モーセはヨセフの遺骸を携えていた。それはヨセフが、「神は必ずあなたがたを顧みてくださる。そのとき、あなたがたは私の遺骸をここから携え上らなければならない」と言って、イスラエルの子らに堅く誓わせていたからである。

創世記の最後でヨセフが自分の生涯が終わろうとする時に、彼は父ヤコブと同じように自分の遺骸をエジプトで葬ってはならないと言いつけました。そして自分の体をミイラにして、神が約束の地に私たちを連れ上られる時に、その遺骸も携えなければいけないことを命じました。その言いつけを今、モーセはきちんと守っているのです。ヨセフはこの出来事を約四百年近く前に予告していました。彼は神の約束を信じて、必ずエジプトから神はご自分の民を連れ上られることを信じていたのです。ヨセフもまた、世から別たれていたことを知っていました。自分はここには属さない、死んでもカナンの地、神の約束の地に属していることを信仰をもって表明していたのです。

20 彼らはスコテを旅立ち、荒野の端にあるエタムで宿営した。

エタムの所からエジプトに出て、シナイの荒野に入っていきます。今のスエズの辺りです。

21 【主】は、昼は、途上の彼らを導くため雲の柱の中に、また夜は、彼らを照らすため火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた。彼らが昼も夜も進んで行くためであった。22 昼はこの雲の柱が、夜はこの火の柱が、民の前から離れることはなかった。

実に主は、荒野の旅の四十年間、雲の柱、火の柱となって彼らと共におられました。どこに行けばよいか分からなくても、主が導いてくださいます。沙漠の気候というのは私たち日本人が慣れている温暖気候とは両極端にあります。日本はとくに湿度が高いです。ゆえに、日中と夜間の温度差、また夏と冬の温度差はそれほどありません。日本を出れば、「寒いけれども暑い」とか、「暑いけれども、日陰に入ると涼しい」という経験をします。日差しによってものすごく暑いのですが、湿度が低いために日陰に入れば涼しいのです。シナイでも、日の下にいる時の温度は、日焼けサウナどころではありません。けれども、冷房がなくても、お店の中に入ればかなり涼しいのです。夜間は夏でなければ、むしろ寒いほどであると言われます。したがって、昼間が雲の柱、夜間が火の柱というのは、彼らの道しるべになっただけでなく、彼らを日差しから、また寒さから守っていたのです。

これこそが、主のご臨在によって生きる、聖別の民の姿です。主が守ってくださいます、昼の熱さ、夜の苛酷さから守ってくださいます。私たちも、この世に生きていて主のご臨在こそが私たちを守るのです。